鄧小平の活躍する中国　言論人-1974.06.25

言論人
毎月3回5・15・25日発行
言論人懇話会
東京都中央区銀座2の2の18（西欧ビル）
郵便番号　104
電話　東京（561）4311
振替口座　東京101047
1ヵ年2500円1部70円

鄧小平の活躍する中国

状況は極めて流動的

注目すべき「批林批孔」の帰趨

中嶋嶺雄

ひとたび鎮静化するやに見えた中国の「批林批孔」運動は、このところ再び大きな潮となって全中国を覆っている。最近、中国を訪問した私の教え子の一人によれば、上海の保育園では園児たちが「ピー・リン／ピー・コン／ピッピッピッ……」と歌と踊りで林彪批判・孔子批判を演じていたそうで、このような現象は文化大革命の時期の雰囲気とまさに一様である。折しも六月中旬になると、北京や広州で、旧幹部の復権を批判し、いわゆる「脱文革」化傾向を激しく批判する壁新聞が出はじめたといわれ、その事実がロイターやAFPの外電によって、さらにはまたこのような問題の報道にはきわめて慎重なわが国の北京特派員電によっても伝えられはじめた。状況はなおきわめて流動的であるように思われる。

そうしたなかで注目を集めている問題は、周恩来 総理の 活躍の〝後退〟と、それに反比例した鄧小平副総理の精力的な活躍ぶりである。もとより、周総理のこれまでの、そしてとくに過去一、二年の活躍は、あまりにも目覚しく、超人的であっただけに、七十六歳という高齢からする健康上の問題が、周恩来の激務を軽減させることになったこと自体は、それなりに真実であろう。だが反面、「批林批孔」運動が一貫して〝周恩来批判〟とも思える反潮流の方向をそのなかに混在させていることや最近の壁新聞に見られるような「脱文革」への反批判の動きなどを考えたとき、問題はかなり複雑にならざるを得ない。それだけに壁新聞による批判と反批判が今後どのような方向に進むのか、大いに注目すべきであろう。

「脱文革」の潮流の中で

それにしても、たとえば『紅旗』一九七四年第四号の北京大学・清華大学大批判組の論文「孔丘その人」が、孔子の出身を没落奴隷主貴族の家庭たとして暴き、『周礼』をなじり、そのうえ、「孔家のこの二男坊は、『しゃべるばかりで書かず』、まったくなにも書き残してはいない」と述べている林批孔」運動が〝周恩来批判〟を含むのではないかという外部世界の推測（幸か不幸か、劉少奇、鄧小平、陳伯達、林彪等々への批判の場合、このような外部世界の推測がすべて正しかった）があることを中国の当事者たちは十分に承知しているはずであり、劉少奇、林彪と相次いで失脚していった激動の政治過程において次は誰かという不安な心情が、広く中国人大衆の心の底に潜んでいることも疑う余地がないのだから、論文の執筆者たちは、このような文章を無意識では書かないはずである。

近着の『紅旗』第五号になると「林彪の反革命的策略の破産――一冊の黒いノートを批判する――」という余凡署名の、さらに注目すべき論文が戦っている。余凡論文は、「中庸の道」や「合理」を、そして「表面上は〝左傾の高姿勢〟をとった、……実際上は徹頭徹尾の極右派」を激しく論難している。同論文はこうして一方で〝極左思潮〟を攻撃しつつ他方では〝反右傾〟といって〝大多数と団結する〟といった「中庸の道」の「反動性と虚偽性」を激しく批判し、「いわゆる〝中庸の道〟は、実際には反革命の復辟の道であり、陰謀家の人をあざむく道である」と述べているのである。このような文章を忠実に読めば、その含意する方向はかなり明白なのだが、なぜ、わが国の新聞は、このような文章を忠実に紹介しないのであろうか。ここに見られるように、今日の「批林批孔」運動は、きわめて複雑な内容を含む政治闘争を反映しているといわねばならない。すでに中国共産党内部には、文化大革命時の文革小組にも似た「批林批孔弁公室」が設けられ、江青がその主任を、張春橋、姚文元が副主任を、王洪文が顧問をそれぞれ担当しているとの情報もあるが、もしもこのような情報が正しければ、「批林批孔」運動の輪郭はより鮮明なものになるであろう。

周恩来への批判も混在

こうした状況のなかで鄧小平が脚光を浴びているのである。周知のように、鄧小平は昨年四月、私自身もかねてから予測したように、国務院副総理の肩書きを維持して復権した。昨夏の十全大会では中央委員にとどまったものの、去る一月、地方軍区司令の大幅な人事移動と前後して政治局委員に復帰し、同時に中央軍事委員会の重要ポストに就任していることが明らかになった。最近、周総理にかわって外国賓客を接見している姿や先の国連資源特別総会での活躍をみるかぎり、鄧小平はすでに五人の副総理のうちの〝第一副総理〟の地位にあることは明らかである。しかも、先の国連演説でも明らかなように、彼は世界を米ソ二超大国、先進工業国、発展途上国という三大地域に区分して、かつての中間地帯論、そして、ソ連を「社会帝国主義」と規定して以来の新中間地帯論にかわる中国の新しい世界認識とそれに基づく世界戦略を提起し、今日の中国を戦略的に動かす政策的なリーダーシップの地位をすでに掌握しているといってよい。しかも、去る四月十四日にニューヨークでおこなわれたキッシンジャー国務長官との会談は、その内容がまったくヴェールに包まれたままであるだけに、きわめて重要なものであったのではないかと思われ、こうして、米中関係においても、鄧小平は周恩来にかわって大きな交渉相手になったのである。

このような鄧小平の活躍は、彼が従来からきわめて有能かつ精悍な党官僚であり、理論家・オルガナイザーであったというその実力を考えたとき、林彪翼変以後の中国における政治的リーダーシップの空隙と今日の中国政治における極度のジェロントクラシー（老人支配）の現状（毛沢東八十七歳、周恩来七十七歳、朱徳八十七歳、葉剣英七十六歳、等武八十八歳）、最近の中国が対ソ戦略上、その国際的地位の強化を望むヨーロッパの場合、ジスカールデスタン仏新大統領は四十八歳、シラク仏新首相は四十一歳、シュミット西独新首相は五十五歳である）を顧みたとき、七十二歳とはいえいまなお旺盛な鄧小平が大きな役割を担うべきことに、本来、不可解な点はないはずである。

だが、文化大革命の時期には鄧小平への激しい批判が、毛沢東主席自身によっても再三おこなわれたばかりか、江青夫人などからは「鄧小平を徹底的に打倒し、永遠に立ちあがらないようにしよう」とまで叫ばれ、公開の「反革命陰謀」の数々や鄧小平の「反革命陰謀」の数々（拙著『中国像の検証』、中央公論社、参照）からすれば、今日の鄧小平の活躍はあまりにも印象深く意味多いものであり、私自身も一九六六年秋の訪中時に鄧小平の公開の席（その「最後の場面」を目撃しているだけに、やはり、中国政治の激動の航跡をまざまざと感ぜざるを得ないのである。

オルガナイザーの活路

では、このような鄧小平の復権と指導をどのように解釈すべきであるのか。まず第一には、旧幹部復権の必要を迫られた昨年春の段階で復権した鄧小平が林彪翼変をめぐる角逐には、まったく当事者でなかったことが指摘できよう。この点は、林彪翼変に多くの関与があった周恩来と対照的である。

第二には、米中接近や日中国交をもたらした周恩来外交にたいし、「国際的規模における階級闘争を忘れた現実主義」とか「媚外政策」とかの批判が一部で起っていることの意味である。とくにニクソン政権が内政上のスキャンダルで動揺して米中接近の意義が少なからず減価してしまったことは〝周恩来外交〟への批判をさらに強めたものと思われる。そして「脱文革」への全般的な批判がこのところ生じつつあることは、文革派、脱文革派にたいして〝等距離〟であった鄧小平の〝第三のエポック〟としての登場を容易にしたものと思われる。この点では、中ソ関係の現状にかんがみて鄧小平がかつて中ソ論争の第一線に立っていたことも大きく作用しているにちがいない。第三には、明らかに「脱文革」の潮流のなかで鄧小平は復権しながらも、彼自身、毛沢東・江青らのかつての批判を忘却するはずはなく、一方、鄧小平が窮地に陥っていた時期の周恩来の中立主義的なポーズにも彼は自覚的であるはずであり、そのような状況をすべて呑みこんで彼は今日の地位と役割を担おうとしているものと思われることである。この点にも鄧小平の 並々ならぬ政治的感覚が感得できよう。そして第四には、鄧小平が陳錫聯、許世友、李徳生、楊勇ら地方実力軍人と深い連繋があると思われることであろう。

いずれにせよ、「批林批孔」運動の今後の帰趨と毛・周以後へ向けてのリーダーシップの流動のなかで当面、こうして〝鄧小平の時代〟がつづくものと思われるが、もとより、あれほどまでに予告されつづけた全国人民代表大会が依然として未開催であることにも示されるように、中国の政治情勢の安定化は、まだまだ期待できそうにない。ここに今日の中国の苦悩があることは言を俟たない。

（東京外国語大学助教授）

提言

世代とヒーロー

岡田嘉子が日本へやってきたとき、ジャーナリズムは異様な騒ぎかたをした。少なくとも岡田嘉子という名前などそれまで一度も耳にしたことのない若い世代にとって、なぜジャーナリズムが彼女についてあれほど騒くのか理解できなかったに相違ない。ある青年は筆者に、あれはジャーナリズムを私するものであるとさえいった。つまり、岡田嘉子にあこがれていた老いたる世代がその感傷の吐け口をジャーナリズムに求めたというのである。この青年ほど若くはない筆者にもその気持はよくわかる。筆者もこの老いたる元女優とは無縁の世代に属するからである。

横井庄一氏や小野田寛郎氏にたいするジャーナリズムの態度も普通ではない。なるほど彼らは異常な体験をしたし、異常な体験はニュースにする値打ちがある。しかし、たとえば「そっとしておいてほしい」という小野田氏の言葉を大々的に紙面に扱う新聞はそれ自身平気で矛盾を犯しているのであって、やはりどこか狂っている。この熱狂ぶりも横井氏や小野田氏と同世代の人たちに属している。嘘だと思ったら赤提灯ぶらさげた居酒屋かバーをのぞいて見るがよい。今でこそやや下火になっているものの、小野田氏の帰国について延々議論しているのは、やはり小野田氏とは同世代の人たちに限られる。

東海林太郎は死んだが、今なお藤山一郎や霧島昇が歌をうたっていられるのは彼らを支える同世代人のおかげともいえる。逆にこれら同世代人は自分たちの支持する歌手が健在であることに慰められているのである。

藤山一郎や霧島昇の名前など知らないで、野口五郎や西城秀樹に熱を入れている少年少女諸君もあと半世紀ほどして、野口五郎や西城秀樹が健在であったら大いに慰められるだろう。

このようにどの世代も自分たちの世代に属しその世代を代表するヒーローをもっているし、それなりにつくりだすものだ。ひるがえって、そのヒーローは彼の世代に共通する固有の経験のシンボルである。たとえば横井氏や小野田氏にたいする両氏と同世代の人たちの熱狂は、これらの人たちすべてに共通する軍隊経験を背景にしている。もちろんこの同世代人の中にも両氏を批判的に見て、軍国主義への傾斜の危険を脱いた人もいた。しかしこの世代に属さない人々の眼から見ると、そういう批判もまったく噴飯ものとしかいえない。方向がマイナスをむいているとはいえ、この種の批判者も両氏にたいする熱狂を心に抱いているという点では同じだからである。

ところで六〇年安保といわれる事件を、その政治的立場の如何を問わず共通して体験した世代の活躍が各分野で目立ちはじめている昨今、筆者の目下の関心は、六〇年代末、日本のみならず世界を襲った大学紛争を共通して経験した世代が、どのように成長しているか、どのような創造的仕事にとりくんでいるか、どのようなヒーローを生みだすかに向けられている。

超々短波

宮崎県木城中学校のSという教師が、動務成績不良でクビになった。彼は県教組本部の書記で、日教組の若いアクティブだった。直ちに彼は解雇取消しの訴訟を起こしたが、宮崎地裁はそれを却下したという▼判決理由によると、この先生、スポーツ・シャツやトレパンで教壇にあがるのは毎度のこと、県教育長が注意をすると「そのうち一杯やりましょう」という始末で、態度がはなはだよろしくないのである▼そのうえ常識もない。サンケイによると、質問を質問、態度を態度、朝礼を朝令と書くていたらくである。だから、生徒が誤って教室に「一日一喜」（一日一善）「積任をもって」（責任をもって）と貼り出しても、訂正する能力がなかったという▼あきれたものである。だが、周囲を見わたすと、こんな酷いのは滅多にあるまいが、若いときから学生運動、組合運動に血道をあげている連中に、この欠陥先生のご親戚すじが多い気がしてならない▼私事を申して恐縮だが、短波子はつねに学生や若い人にむかって「三十歳までは労組運動をやるな」と警告している。労組運動を白眼視するからではない。人間、少なくも三十歳までは、修業第一だと思うからだ▼学問もはんぱだし、職場の知識もろくにないのに、修業さかりの青春を愚にもつかぬ「運動」に投入すべきではない。かりに彼らのいう理想社会が実現しても、それからの生活はどうする気だろう▼どんな社会になっても、タタキ大工はタタキ大工である。学生運動とか組合運動で、ワイワイ騒いでいるうちはよいが、気のついたときは社会のお荷物だ。だから、若いうちは学問や職場に沈潜せよというのである▼槙枝日教組委員長を、組合の一団が羽田に「歓迎」の旗をもって出迎えた。細川隆元氏は迎の字を間違っていたと笑った。が、それよりも日本人が日本に帰ったのに、歓迎という感覚が変だ▼やはり市販テストは必要である。

とびきり個性的なミニコミ誌
ざっくばらん
6月号
○大胆、卒直に論ずる政治・外交・軍事・経済社会欄○キッシンジャー長官へのラブ・レター○共産党の勝海舟批判
（75字で書くエッセイ）より
マスコミ　岸信介
韓国で日本の学生二人が逮捕されたことに対して、日本のマスコミは騒いでいる。数年前、某経済紙の北京特派員が逮捕された時どんな態度をとったろうか。（元首相）
☆旧戦友
旧軍旗祭の日をトして三十年ぶりの旧戦友が相集うた。我れ人共に白髪であった。彼らは以外に時勢を慨慨せず、われ一代は古風を墨守して生きてみせる心意気だった。（作家）
☆日教組　迎名
警察に警戒"聖職"にゆさぶられ教頭は冬の陣　槙枝は夏の陣
日教組ILOへ神頼み
日教組金はあれども智慧はなし
日教組よくよくみれば日共組
B5判　8頁・一部一五〇円
予約一年一、八〇〇円（送料含む）
ハガキ・電話・現本献送ります
（申込先）……
〒一〇四　東京都中央区銀座一一四一六　奈須田ビル（株）並木書房
電話（五六一）七〇六〇
振替＝東京八七八九一番

東京都新宿区新宿一一二五一一三・（電代（三五四）〇六八五
原書房
戦後 世界軍事資料〔1970～1973〕3
●ベトナム戦争・第二次印パ戦争から中東戦争まで――最新の資料と具体的な分析――①兵器・軍事技術の進歩　②戦略論・国防政策の推移　③地域的軍事情勢の動き　④国際的平和維持活動の四つに内容を分けて論述する。
■戦略問題研究会編／A5判上製3300円
近代西欧戦史
佐藤徳太郎著／A5判2800円
統率の実際＜1＞
陸幹校修親会編／B6判1100円
統率の実際＜2＞
陸幹校修親会編／B6判1100円
■戦略問題研究会編
戦後・世界軍事資料（1945～1969）1
戦後・世界軍事資料（1945～1969）2
A5判上製／各2200円